

装飾古墳ワーキンググループ（第1回）議事要旨

1. 日時 平成29年6月30日（金）16:00～17:30
2. 場所 文部科学省3F2特別会議室
3. 出席者（委員）

甲元座長，山尾副座長，梶谷委員，高妻委員，和田委員，村崎委員
(事務局)

文化庁：山崎文化財部長，熊本文化戦略官，圓入美術学芸課長・古墳壁画室長，大西記念物課長・古墳壁画室サブリーダー，饗場記念物課長補佐，朝賀主任文化財調査官，建石古墳壁面对策調査官，近江文化財調査官，宇田川文化財調査官，青木文化財調査官，横須賀文化財調査官 ほか

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所：早川保存科学研究センター副センター長，犬塚保存科学研究センター分析科学研究室長，早川保存科学研究センター修復材料研究室長，佐藤保存科学研究センター生物科学研究室長 ほか

奈良文化財研究所：島田研究推進支援部長，津田研究支援推進部連携推進課長，内田文化遺産部遺跡整備研究室長，石橋飛鳥資料館学芸室長 ほか

京都国立博物館：降幡保存科学室長

4. 概要

- (1) 開会
 - (2) 委員及び出席者紹介
 - (3) 古墳壁画の保存活用に係る調査研究について
資料1に基づき，事務局から説明を行った。
 - (4) 座長及び副座長の選出について
委員の互選により，甲元委員が座長に選出され，甲元座長から山尾委員が副座長に指名された。
 - (5) 議事
- ① 装飾古墳の被災状況と対応について
村崎委員より資料5に基づき，近江調査官より資料6に基づき説明を行い，次のとおり意見交換が行われた。

山尾副座長：古墳の単室・複室，横穴墓の状況は，土地によって形や構造が違っている。この報告書（資料6）では典型例を書いているが，全部ではない。この報告書で内から見る部分は大体分かるが，奥行き，石組み構造の裏側が全く分からないというのが，問題だ。それがどうなっているかが把握できないと，本当に安全かというのはなかなか保証できない。今後この石組み構造が，奥行きも含めてもう少し分かってくると，点検の方法も分かってくるのではないかという気がする。日頃から，どういう損傷があり，どういう状況になっているかということ，図面・写真・ビデオなどのいろいろな形で記録，保存し，それと

過去の整理から現在に至るまでの保守状況も系譜として残すことが非常に重要である。個々の古墳カルテをどんどん作れば、今後何かあったときには非常にそれが役に立つ。誰がどのように補修したか、どういう材料を使ったのかという記録を残していくことが重要だ。このカルテが、何かのときの備え、あるいは定期点検・維持管理に役立つことを期待している。

村崎委員：熊本県では、山尾副座長に作っていただいたカルテを基に、今回被害を受けていない古墳を現地で確認し、項目に足りないところがないか等を含めた検討を始めたところ。そのほかの古墳についても、今後段階的に確認しながら、このカルテをよりよい形にしていきたい。

建石調査官：山尾副座長より、カルテの話をもう少し細かくいただけないか。

山尾副座長：(資料6) 89頁に、古墳カルテのチェックシートを入れている。縦列に墳丘、単室・複室、横穴墓という区分をおき、横列に外側の形状について亀裂、斜面の崩壊、乾燥状態や空洞があるかといった損傷状況の項目をおいた。これを古墳ごとに入口、前庭部、羨道、羨門、前室、玄門、奥室といった形で、該当するところをチェックしていく。どのぐらい損傷しているかのランク付けも必要かもしれないが、そこまではまだ入っていない。実際は、図面等があり、石材それぞれに亀裂や緩みがあることまで記録する必要がある、ほかに図面や写真などの情報を付すことをなど改良していくことが重要だと思う。

建石調査官：甲元座長にも資料6への執筆をいただいており、熊本の古墳の考古学的特徴と、地震による被害の相関等の話をいただけないか。

甲元座長：熊本の古墳は、大きく2種類の石室構造がある。(資料6) 74頁の大戸鼻北古墳の石室に見られるように、ほとんどの場合、熊本の古墳は一番下から板石を積み上げる。積み上げて、その内側に石の板を4つ並べて区画を作り、その中に仕切り石という板石を付けて、死体を埋葬する施設とし、初期は、仕切り石を2枚入れ、川の字型の屍床となる。そのうちに、一番奥壁に横に仕切り石を付け、コの字状の屍床が出来るようになる。これを石障構造と言ひ、熊本で特別に発達した石室構造。その後、奥壁に作った石障に上だけを特異に高くして屋根を付けるものを石屋形と言ひ、(資料6) 88頁上の図となる。この図は井寺を摸して作ったが、この中の15番のところだけ特異に板石を載せ、屋根を作って特別にしつらえる。このような石障と石屋形という形の特異な構造をとり、四、五世紀の段階では石室の周りを区画する石障に文様を描く。(資料6) 76頁は天草の長砂連古墳だが、直弧文という独自の文様を彫ったりする例がある。そして、(資料6) 74頁の大戸鼻北古墳のように板石で積み上げていく方法は、6世紀半ばまで続き、積み方も特殊で、大きな厚めの石と、その間に小さな薄い石を積み重ねる、「間詰め」とい技法で、朝鮮の楽浪までずっとさかのぼる技法。それがどういうわけか、熊本の場合は4世紀終わり頃から6世紀半ばまで続く。その後、日本全国どこでもあるような、腰石と言う大きな石を一番下に据えて、腰石の上に石を積み重ねていくという方法になる。

また、付け加えると、板石積みで作った場合は、奥室が方形で、だんだん角を消すように積み重ねていき、最後はドーム状になって丸天井になる。(資料6) 88頁上の図にあるように、天井石を置いて、天井線を円形にめぐり込むので、熊本の装飾古墳の4世紀終わりから6世紀半ばの石室はドームを意識して作られている。それに対して、(資料6) 88頁下に見られるのが、石室の基底部に大きな石を張りめぐらせ、その上から積み上げていくという

構造だが、どういうわけか熊本の場合はドーム型になるような形に正方形の石室を作って積み上げている。一方で、北九州型と言うのは、同じような腰石を作って回しても、長方形の石室構造で、ドームみたいに角を消さずに目地がずっと上まで通り、下から天井を見上げると長方形になる。熊本の場合は円形で、独自の積み方ができてくる。

さらに6世紀半ば以降になると、この腰石の上に大きな平たい石棚を据えて積み上げるという特殊なものが出てきて、装飾とともに一部九州各地で伝播し、熊本の場合は主として、装飾は石障に限られている。その次には石屋形という特別なしつらえに出てきて、そして腰石が出た段階になると、腰石、玄室の前の羨門や袖石に装飾を施すものによって変わってくる。そして、最初の古い段階は全て線刻で、直弧文のような浮き彫りをして作る。ところが、5世紀の終わり頃、千金甲古墳や井寺古墳のように彩色するものが出てくる。福岡の方へ装飾古墳が広がるようになると、最初の弘化谷古墳は一部に縁取りをして彩色するけれども、日岡古墳や桂川大塚古墳は全然縁取りをしないで、いきなり円、三角形や馬の形などいろいろなものを描くようになるという特色がある。どういうわけか熊本の場合は、同じ文様を描くにも必ず線で外郭線、内弧を入れ、そこに色付けしていくという特色がある。

建石調査官：昨年度の議論の中でも、装飾古墳であるがゆえに、普通だと土を取らないようなところの土も取って石室を公開した結果、石之室古墳のような被災の状況もある。肥後型石室、石障、石屋形、装飾という熊本ならではの古墳の在り方に起因する被災の状況と、全国でも同じように話が通じていく部分と、両方ある。

甲元座長：少し加えると、壊れているものを見ると凝灰岩で作られたヒンジが壊れる場合が多い。凝灰岩の中でも馬門石というピンクの石はすごく堅いので、表面が剥落するような形で壊れる。そのほかの白や黒の凝灰岩は少し柔らかいため、ひびが入ってグシャッといくという壊れ方をするので、個々の古墳に使われている石材も大きく関係することだと思う。ただ、熊本に特殊な、板石で積み上げている場合、後ろの控え積みがどうなっているかに対する検討が十分されていなかったことが問題。なので、山尾副座長も内側から見ただけでこうだとはなかなか言いにくく、やはり背後や墳丘下の裏側の構造をある程度しっかりと把握しないと、構造の強い点、弱い点は識別しにくい。墳丘をどうやって築いたかということもある程度考慮に入れたいといけな。

建石調査官：このワーキンググループでは、将来に向けてのカルテ作りのような話がまず一つの方向性。もう一つは先ほど村崎委員の報告にもあった現状。震災後、現地を訪れるたびに被害が大きくなっているように見える状況にどう対応するか。この二つ目の方向性について、先般現地を視察した和田委員・梶谷委員の意見をいただきたい。

和田委員：見せてもらった部分や今日の投影スライドのほか、埋蔵文化財ニュースの表紙に写真がある井寺古墳の実測図が（埋蔵文化財ニュース）6頁に掲載されているが、ただごとの壊れ方ではないと感じる。非常に微妙なバランスで、真ん中がへこみながら、なおかつ落ちずに残っている格好で、この古墳の石材は、今の甲元座長の話から、若干手が入っているかもしれないが、板石積みの横穴式石室の墳丘を断ち割ったような発掘調査例は割と少ないと思う。大きな石材を使った横穴式石室の調査例は結構あると思うが、板石積みの事例は少なく、佐賀県の久保泉丸山遺跡等に調査例があるかもしれない。前もって墳丘の築造過程等をチェックしておかないと、どういう形で手を加えるかも含めて、難しくなると感

じる。井寺古墳に関しては、内部が崩壊しているのか、鉄板に圧力が掛かっており、詳しく検討しながら調査をしないといけない。

梶谷委員：桂原古墳の中に入ることができた。非常に細かい線刻で船に乗る人間の絵が、現代人・近代人が想像できないような描き方で描いてあった。桂原古墳は何世紀ぐらいのものなのか。

甲元座長：恐らく6世紀の終わり頃。

梶谷委員：絵が重ね合わせて描いてある大変不思議なもので、私がお手伝いできる場所があれば、そういうところで編年や絵の分類、意義付けなど、教育委員会はもちろん、地元の高木恭二先生らとも連携しながら進めていきたい。

建石調査官：井寺古墳の内視調査を実際に担当いただいた奈文研の高妻委員から、現状を解説いただけないか。

高妻委員：村崎委員から報告があったように、井寺古墳は、羨道部の天井が一部扉にもたれかかるような形で落ちており、扉が開いてしまうと、この天井が落ちてしまい、連鎖して羨道部をたたんでしまう危険性がある。そのため、扉が開かないように押さえ込んでいる状況で、何から手を付けていくのかということが非常に大きな問題になっている。墳丘に亀裂ができ、そこから雨が降ると雨水が流れ込んでいくだろうということでシートを掛けたために、単純に言うと土が乾燥してやせていき、やわらかくなっている。そうすると墳丘としての力をなくしてしまい、いずれそれも影響が出てきて、石室そのものの構造が緩んでいくことも考えられる。これは井寺古墳だけではなく、今城大塚古墳も同じような状況。最初豪雨被害があり、復旧事業の一環として撮影されたが（埋蔵文化財ニュース10頁右側中段の写真）、かなり墳丘そのものの土が緩んでしまっている。それと、中には入れない状況で装飾をどうするのかということで、カビや汚れは、水の動きになってくる。早急な調査の進め方と、復旧に向けてどういうロードマップを描いていくのか、これが非常に大きな問題。

建石調査官：井寺古墳について、先般史跡指定地の追加などがあったが、直近の動向を伝えてほしい。

近江調査官：井寺古墳は、地震発生当初、石室のある部分だけが指定されている状況だったが、今後の修復に関して、その状態だと支障が出るだろうと、指定地の周りを既に町有地化し、町有化した部分の追加指定の意見具申をしていただき、文化審議会でも無事答申があったところ。順調にいけば、秋には官報告示されて史跡の追加指定となるだろう。

村崎委員：史跡の範囲が広がり、復旧に向けた準備が整いつつある。その検討に際して、7月に嘉島町で古墳復旧のための検討会議を立ち上げると聞いている。

② 今後のワーキンググループの進め方について

事務局から今後のワーキンググループの進め方について説明を行った。次回のワーキンググループは、日程調整の上、連絡する。

(6) 閉会

以上